

###

そこは暗い廊下だった。壁はコンクリートで、鉄格子のまどから日の光がうつすらと差し込んでいる。床に投影されたその日の光には、ところどころ梢に遮られて影があつた。窓の外は鬱蒼とした木立。大輝は廊下の壁に背をもたれて床にそのまま座っている。大輝は半分夢うつつのままマシンガンを胸に抱いていた。

そしてしばらくの間、大輝が半分船を漕いでいると

「大輝、起きろ！ 仕事だ」

大輝は響くような怒鳴り声で起こされた。大輝は

ハツとして慌てて立ち上がると、声の主の方を向いて敬礼する。

「こいつは外部活動部隊から引っ張られてきた要人捕虜だ。おまえを監視役につける。適当に世話しとけ」

「はっ。」

先ほど大輝を怒鳴りつけた男——大輝の先輩——は後ろにいた手錠を掛けられた男を大輝の前に突きだした。男はヒゲを生やしており、そのヒゲも、髪も白い。

「ここに入るのかい」

男は先輩に聞いた。

「そうだ」

先輩は手錠を外すと男の背中を独房の中へ突き飛ばす。

「やれやれ、お手柔らかに頼むよ」

男は穏やかな口調でそういうと、独房の床に腰を下ろした。独房と廊下は、やはり鉄格子で区切られている。すると先輩が大輝の方を向いて言いつけた。

「責任持つて担当しろ、おまえももう一人で何でも出来るくらいの経験があるはずだ」

大輝はまた敬礼する。先輩は独房の鍵を大輝に渡すと、廊下の奥に消えていった。

大輝はニ才。今はある反政府組織に所属している。その組織の名は燈頂会。その組織は数年前発足したもので、最近では世間でもよく知られるほど勢力を拡大していた。有効な対策を打てずにいた政府は世論にせつつかれてやきもきしていたが、そんなことは大輝には関係ない。大輝は場所もそのアクセスルートも秘密裏に造営された捕虜

収容所に勤務していた。先ほど大輝を怒鳴った平馬はその収容所の管理に携わる一人で大輝の先輩に当たる人だ。大輝は今は収容所に送られてくる捕虜の世話を申しつけられて仕事をしているのだった。

大輝は日本の未来を憂いていた。

（この国の政治は腐敗するばかり、輝かしい未来なんてあつたもんじやない。）

社会や経済は不安に陥り、国民は困窮している。何も出来ない政治家はあてにならない。そんなときに出会ったのがこの反政府組織だった。

（俺からこの国を変えてやる）

そう思っていた大輝は、一大決心をしてこの反政府組織に入隊した。ここでなら自分も何かできそうだと思っていたのだ。そして放任主義の大輝の

親はいまだ大輝が燈頂会に入ったことにさえ気づいていないようだった。

先ほど連行されてきた男は年配の男で、先ほども言つたとおりヒゲも髪も白い。琥珀色の縁の分厚い眼鏡をかけ、大輝が先ほどそうしていたように独房の中の壁にもたれて座っている。

（はやく俺も外部部隊のような花形の仕事がしたいなあ）

大輝はぼんやりとそう思いながら独房の鉄格子の外から呼び掛けた。

「おっさん、トイレは部屋の隅。ベッドはないがそのタオルは使つていい。食事は一日二回、決まった時間に運ばれてくる、わかったな」

すると男は大輝のほうを見ていった。

「もうしわけないが、水を飲みたいんだけどね」

「水か。あとでペットボトルに入れて持つてくる」

「ありがたい。」

男は小さく頭を下げた。

数時間後、大輝は上官に言いつけられて保管庫に来ていた。保管庫といっても武器やなんかが置かれているわけではなく、捕虜たちから没収した身の回り品を保管しているだけの部屋だ。上官から少しでも組織にとって有利な情報がこれらに含まれていないか確認するように言われたのだ。捕虜をとつたときにはいつもしていることだ。

大輝は保管庫の重い鉄扉を開いて中の電気をつける。あの捕虜の男の番号、「132」と書かれたケースを引き出すと、そこには多少変わった形の

バッグがあつた。バッグを開いてみて、大型の角封筒を取り出すとそこにはある物が閉じられていた。それは、大輝にとって見覚えのあるものだつた。

これは、絵コンテか。――

それは紙の束だつた。一つずつ片面に印刷で枠が書かれている。その枠の中には雑多なメモと、コマ漫画のようなラフが鉛筆で描いてあつた。表紙にはこう書いてある。

「隣と未来」

その紙の束をめくっていると、大輝の頭の中には思い浮かぶことがあつた。

大輝はこの反政府組織に入る前に、アニメ制作者

を目指していた。専門の学校に入り、アニメの製作に関する技術や知識を学んでいたのだ。しばらく通った後、周りの人間と比べて自分の才能の限界を感じて、結局反政府組織にはいると共にやめてしまったが、しかし、大輝の心にはまだ夢の欠片が残っていた。

大輝はその絵コンテを見たときに心が高ぶるのがわかった。

（この絵は、あの人のものか——！）

筒美監督——

その人は大輝の憧れの人だった。大輝がアニメを作りたい、と思うようになったきっかけは、その人の作品を見たからだ。顔も知らない人だが、大

輝にはわかる。この絵は、その人が描いたものに
違いない。どこか画風が似ている。

大輝は絵コンテを丁寧に着封筒にしようと、他の
上官受けしそうな物品だけ手に上官室へ向かつ
た。

上官室では上官たちがテレビを見ていた。一連の
燈項会の外部活動部隊の拉致事件を扱ったニュー
スだ。ニュースキャスターが原稿を読み上げてい
た。

「先ほど政府は今回の事件で拉致された人を救出
するため、燈項会に対して司法取引を提案するこ
とを決定しました。今日の燈項会に対する対策会
議で首相は――」

すると上官はブチッとテレビの電源を切る。そし

て机の前に立つた大輝にこういった。

「政府のことなんか信用できない。いいか、一週間後に収容所にいる捕虜は全て処分する。」

大輝は理解していた。そう、今度大輝が担当になった要人は、筒美監督であると。そして、尊敬する彼は今命の危険にさらされているのだと――。

そして数日後、大輝が待っていた日が来た。その日大輝は当番制になっている捕虜の監視業務の指示を担当することになっていた。そして大輝はあのアニメ監督の独房の前に来ていた。そして鍵を開け、そつと扉を開く。監督は大輝のほうに顔を向けた。

「今日ははどんな用事かい？」

大輝は監督のそばまで駆け寄ると、小さな声で

いった。

「今までぞんざいな扱いをして申し訳ありませんでした。——あなたにはここから脱出していただきたいと思います」

監督は驚いた顔をする。

「何も言わないで私についてきてください。脱出には私もご同行します」

「いいのかい？そんなこととして」

監督はさらに驚いた顔をした。

「罨じゃないかと思うかもしれませんが、でも信じてください」

筒美は少しの間考えているようなふりをしたが、

「どうせ私は捕虜の身だ。そんなことまでしてはめる必要もないだろう。わかった。案内頼むよ

——」

大輝は大きく頷いた。

「では、これを着てください。あ、これも要りますね」

大輝は勝手に拝借してきた仲間の戦闘服と、保管庫から持ち出してきたあのバッグを監督に渡した。

大輝と筒美は廊下を走り抜け、扉を開き、まず収容所の建物を出る。外はジャングル並みの木立で、遠く監視台から武装した組織員が監視をしているのが見えた。そして二人は駐車場に止めてある車まで怪しまれないようにゆつくりと歩いていった。後部座席に筒美、運転席に大輝が乗り込む。大輝は車を発進させた。

少し走った後、二人の乗った車は施設の入り口にさしかかった。しかしそこでは警備兵が検問を

やっていた。

（え、なんでだ？　いつもはこんなのないのに

——もしかして、もうバレたのか？）

仕方なく大輝は車を止める。検問員が車に駆け寄ってきた。

「組織員証を出せ」

大輝は無言で組織員証を出す。どうもバレているわけではないようだ。

「OK、行つてよし。ん？」

検問員は視線を後部座席に移した。

「おまえ、見ない顔だな。おまえも組織員証を提示しろ」

筒美は検問員のほうに視線を向けるが、何も言わない。

「あ、この人は……新人なのでまだ組織員証持っていないんですよ」

大輝は慌てて苦し紛れの説明をした。

「新人？　こんな歳でか？　おまえらちよつと待ってろ、本部に問い合わせてみる」

（どうしよう）

大輝は焦った。その時大輝の目に別の車が門を通りすぎるところが見える。門は開こうとしていた。

（今しかない！）

大輝はアクセルをめいっぱい踏む。車はすごい加速度で急発進し、サイドミラーにさっきの検問員があっけにとられているところかわずかに見えるた。

「頭下げて！」

大輝は監督にそういつてから自分も頭を下げる。筒美も頭を下げた。車が門を通り抜けた直後、後部の窓が銃弾の雨で碎け散った。

車はしばらく森の中を通っていったが、山道に入り、じき公道に出た。大輝は警察に電話を掛けた。

「もしもし、私は燈頂会の組織員の一人だが、こちらの提示する司法取引に応じたい。捕虜一名を解放し、私自身も投降する——」



そして数ヶ月後——。

あれから大輝は組織犯罪禁止法の共謀の嫌疑で追求されたが司法取引に応じたために禁固刑は数ヶ月ですみ、今は自由の身になっていた。

大輝は今、筒美監督の新作アニメの完成披露試写会に来ている。会場は観覧に来た人で溢れて、幕が上がると同時に、出演者のインタビューが始まった。

しかしそこにあの監督の姿がない。

大輝は不思議に思って客席から眺めていた。

「では筒美監督、この作品の見所はどこでしょうか」

司会者が話を振る。

「今回の作品は『秋の黄昏』をイメージして作りました――」

しかしそれに答えたのは「あの」筒美監督ではなかった。全く別の人が筒美監督としてしゃべっている。大輝はキツネにつままれたようだった。

（一体どういう事だ？あの人が監督だって――？）

「久しぶりだね、若者さん」

その時大輝の横の席に座るものがある。それはあの「筒美監督」だった。大輝は驚いて口を開けながら聞く。

「あなたは筒美監督ですよ、舞台に立ってなくていいんですか？」

「筒美？監督？　なんの話だい？」

大輝はうろたえながらいう。

「だって、あなたはこの『燐と未来』のアニメ監督なんでしょう？　――だって、だってあの時絵コンテ持ってたじゃないですか。あなたの拉致されたとき持っていた荷物に、アニメの絵コンテが入ってたでしょう？」

「絵コンテ？」

おじさんは頭をひねる。そして合点すると言った。

「ああ、あれか。あれはね、預かったものなんだよ」

「え？」

「私は自転車でメッセンジャーをやってるんだ。確かに君たちの組織に捕まった時はアニメ制作会社の重要書類を運んでいてね。そう、確かに依頼主は中身は絵コンテって言うてたかな」

大輝は口を開けて呆然とする。

「いやあ、こんなに歳なのにメッセンジャーなんか何でやってるのかって思うかもしれないけど、これでも若いときはトライアスロンやっててね。

体力には自信があるんだ。今日は製作会社の友人に呼ばれてね、是非試写会を見に来てくれって言われて来たんだけど。私はあまり興味はないね」

大輝はもう何も言えなかった。

「では若者。君も頑張ってくれよ」

そう言い残すと男は会場の外へ去っていく。

その後大輝が見た本物の監督が作った作品は感動
ものだった。そして、大輝はあのおじさんがいた
からこそ、絵コンテを救えたのだと、こうして披
露試写会まで見に来れたのだと、釈然としないま
まも少し感謝するのだった。

(完) ■ (2008.9.22)

(c) whitecaps 2008 All

Rights Reserved.